

令和5年11月1日

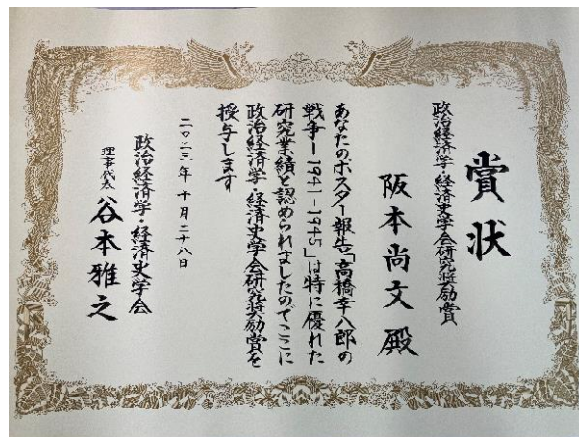
行政政策学類 阪本尚文准教授が 「政治経済学・経済史学会研究奨励賞」を受賞

本学行政政策学類の阪本尚文准教授が、「政治経済学・経済史学会研究奨励賞」を受賞しました。2023年10月28～29日に駒澤大学で開催された政治経済学・経済史学会2023年度秋季学術大会におけるポスター報告「高橋幸八郎の戦争—1941-1945」が、特に優れた研究業績と認められたことによるものです。

【受賞概要】

受賞名：年度政治経済学・経済史学会研究奨励賞

対象業績：政治経済学・経済史学会2023年度秋季学術大会
ポスター報告「高橋幸八郎の戦争—1941-1945」



【受賞対象の概要など】

本ポスターは、戦後の我が国の社会科学に大きな影響を与えた20世紀日本を代表するフランス革命史家、高橋幸八郎（1912-82年）の修業時代にあたる京城（現ソウル）時代の思想と行動を、近年遺族から福島大学附属図書館に寄贈された日記やそれを基に発見された新史料に拠りながら、検討しました。

同学会研究委員会を通じて選出・組織されたポスターセッション審査委員会による選考理由は、下記の通りです。

本ポスター報告は、本学会（土地制度史学会）創設の中心人物の一人であり、大塚久雄・松田智雄と並んで比較経済史研究を牽引した、戦後日本を代表する西洋史家として知られる高橋幸八郎の修業時代にあたる京城帝国大学時代の体験に着目し、その歴史的意味を考察したものである。（裏面に続く）

従来、高橋の「京城体験」については「ほとんど闇につつまれてきた」が、近年、日記などが遺族から福島大学に寄贈されたことで、そうした問題にアプローチすることが可能になった。報告者は、高橋の日記の読解をはじめ、当時朝鮮で刊行されていた新聞などそれと関連する史料を検討することで、高橋の「京城体験」の具体相を明らかにしようとした。

高橋の「京城体験」については、従来、和田春樹氏による批判的評価のほか、報告者による評価（帝国日本の統治政策に抵抗を示さず、精神的には本郷の「西洋史共同体」に属したまま、特権的地位を保障された植民地官僚として研究に沈潜したことへの「罪の意識」が戦後の沈黙につながった、という評価）がある。

それに対して、本報告では、1941年12月8日の日記に、高橋が「世界史の新しき時代」の到来を予感したことが記されており、さらに42年3月7日の『毎日新報』（朝鮮語新聞）では「日露戦争の世界史的意義」を強調する外交評論を執筆していたこと、それに加えて、44年後半には朝鮮各地で「大東亜戦争の世界史的意義」を講演していた史実が明らかになった。戦後の沈黙は、そうした宣伝戦への関与とも結びついてきた可能性、また、高橋のいう「世界史」には、マルクス主義的な発展段階論を前提とする「世界史の基本法則」と同時に、それとは異なるもう一つの「世界史」概念が併存していたことも指摘された。以上の内容が、ポスターを用いて、わかりやすく報告された。

ポスター報告の質疑では、当時の朝鮮の言論空間における高橋の位置づけ、戦後の高橋の思想との関連などが問われたが、報告者はそれらの質問に対して一つひとつ丁寧に、かつ的確に回答した。

本報告の全体的な評価として、新史料の丁寧な読解・検証を通じて新たな史実を発掘するという歴史研究の基礎的作業という点はもちろん、今後、高橋個人の研究はもとより、経済史学の史学史研究、思想史研究、さらに総力戦や帝国崩壊の経験を視野に入れた戦後史研究を豊富化していく可能性をもっており、本報告者はそのことについても十分自覚的であること、今後さらなる研究の発展・深化が期待されることから、2023年度の「政治経済学・経済史学会研究奨励賞」を授与することに決定した。

なお、高橋幸八郎の日記は、福島大学附属図書館大塚久雄文庫で公開する予定です。同日記の整理は、2022年度福島大学重点研究分野 foR-A プロジェクトに採用されることで可能となりました。

（お問い合わせ先）

行政政策学類・准教授 阪本 尚文

メール：n-sakamoto★adb.fukushima-u.ac.jp

★を@に変換してください。